

こう の だい かつ せん 国 府 台 合 戦

16世紀、戦国乱世の時代に、小田原の北条氏が五代、100年間にわたって関東を制覇しました。中でも三代目氏康は、北条氏全盛時代を築きあげました。現在の江戸川区も、この支配下に入っていました。一方、『南総里見八犬伝』で有名な里見氏は、清和源氏・新田氏の流れで、上野国里見郷に住んで里見を称したといわれます。里見氏の祖、義俊の時に、安房国に移り、ここを根拠地として房総に勢力をふるうようになりました。

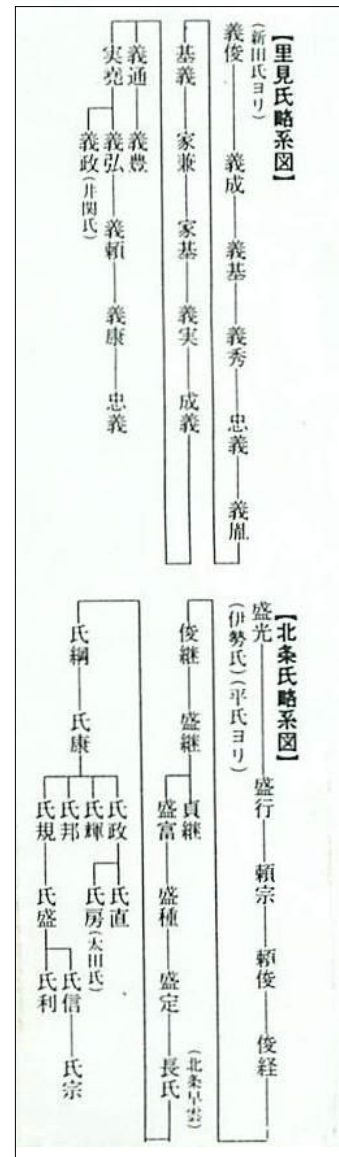
北条・里見両氏の対立は、戦国大名の宿命ともいえます。太田道灌が築城したといわれる国府台城(市川市)を中心に、たびたび合戦が展開されています。

第一次国府台合戦

天文7年(1538)10月、小弓御所(千葉市)の足利義明は関東支配をめざして北条氏と戦うために、里見義堯ら房総の軍兵を集めて、国府台城に布陣しました。

関東の覇者、北条氏綱・氏康の父子は、ただちに江戸城に入り、国府台へと出陣しました。7日早朝に江戸川沿岸に着くや、兵を三隊に分けて河を渡り、手薄な相模台(松戸)方面から南下して、国府台城を攻め落としました。

この合戦で、大将足利義明・義純の父子は討ち死にし、里見義堯は安房国へ退きました。房総の盟主をもって自任していた義明(小弓御所)の滅亡は、傷の浅い里見義堯にとって有利になったといえます。今まで義明の支配していた上総の大半を領有し勢力を拡大しました。



第二次国府台合戦

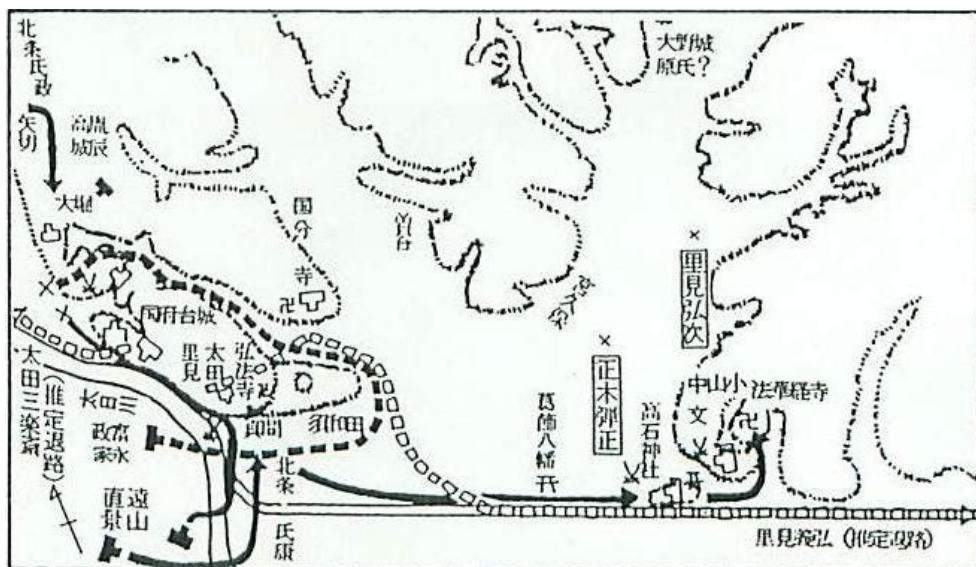
第一次合戦から26年後、永禄7年(1564)1月、義堯の子、里見義弘は、岩槻城主太田三楽斎や、その一族、太田新六郎康資らを誘って、上杉氏と協力し、北条氏を南北から挟み撃ちにするため、国府台に陣を構えました。

北条氏康・氏政らは大軍を率いて、8日早朝、江戸川岸に到着しました。ただちに北条軍の武将、遠山・富永らは、浅瀬より渡河し攻めましたが、討ち死にし、退きました。勝利に油断した里見軍を、再度、北条軍は攻め勝利を得ました。里見義弘は安西実元らに助けられて、安房に逃げ落ちました。しかし、北条軍も天正18年(1590)、秀吉に平定されました。一方の里見氏も、慶長19年(1614)、家康に取りつぶされています。

この合戦で、現在の江戸川区の一部は戦場となり、田畑は荒らされ、農民は兵士として召集されるなど、村々の負担も大きかったようです。



足利義明奮戦の図(『成田参詣記』より)



第二次国府台合戦(1564)関係図

江戸川区郷土資料室

〒132-0031 東京都江戸川区松島 1-38-1 グリーンパレス 3階
TEL : 03-5662-7176 (9:00~17:00)